六章　非医学的なＬＳＤ使用の危険性

精神医学の範疇で、ＬＳＤを科学的に用いる場合はほとんどその危険性はないが、医学的枠の外で、つまり医師の管理なしにこの作用物質を使用する場合は、多様の危険性を生じることとなる。その危険性の一つは、法的に規制された薬物を違法に使用するという外的条件であり、もう一つは、ＬＳＤ特有の精神作用効果によって生じるものである。

ＬＳＤと他の幻覚剤が長い間無規制のまま自由な使用を許された理由は、この薬剤の特性として中毒性がないということと、現在までの相当量の使用にもかかわらず健康的にほとんど害がないということに起因している。ＬＳＤのこの両性質は今までの使用結果から確実に証明することができる。薬の作用によって、きわめて激しい精神的また肉体的障害をしばしばひきおこすいわゆる真性中毒の症状は、ＬＳＤの場合には今までの長い使用期間にほとんど見られることがなかった。ＬＳＤ中毒の直接的な原因で、器官障害をおこしたり、死亡に至ったという報告は今までにまったく受けたことがないのである。

二章の「LSDの動物実験」で、すでに詳しく説明したように、LSDの非常に強い精神作用効果に反して、その実際の毒性はかなり少ないということが証明されている。

精神的副作用

しかしLSDもまた、他の幻覚剤と同様に、ある種の危険性を有していることは否定できない。各種の興奮剤、アヘン剤、そして覚醒剤などが、慢性の中毒症状による精神的・肉体的障害をおこしやすいのに対して、LSDの場合はむしろ、その投与中に生じる危険性である。つまりLSD投与中に激しい精神錯乱状態に陥るのである。したがって投与する前に、入念な内面的および外面的準備を行うことにより、極力そのような状態に陥ることを避けるべきであるが、しかしそれを全面的に除去することは無理であろう。LSDのこの危険性は個人の躁的もしくはうつ的気質性にもとづいて生ずる精神発作と同種のものと考えられるからである。

躁的・気分昂揚的状態の場合は、全能的な妄覚を生じるか、あるいは強い気分変調のとりこになった感覚を生ずることがある。このような錯乱状態の中で、ある種の陶酔感が自動的に作用し始めると、被験者は空中を飛翔することすらできると信じるようになり、その衝動に翻弄されて実際に窓から飛び降りることもある。LSD投与中の不慮の事故数は必ずしも多いわけではないが、マス・メディアはこれをセンセーショナルにとりあげて報道するのである。このようなことは真面目な警告としてとりあげね

ばならないはずなのだが……。

一方、一九六六年に自称ＬＳＤの影響によって行われたとされる殺人事件が世界に広く報じられた。この殺人者はニューヨークに住む青年で、彼は義理の母を殺害したが、逮捕された後に、次のように供述している。つまり、彼の行為はＬＳＤ酩酊中に行われたものであり、したがってそのことをまったく記憶しておらず、しかもその後三日間も陶酔の旅路の中をさまよっていたというものである。しかしＬＳＤ酩酊は最高の薬量を服用したとしても一二時間以上その効果が持続することはなく、もし再度の服用、つまり連続服用を行ったとしてもその効果は最初の薬の耐性が生じるために、かなり小さい、ということが知られている。さらに、ＬＳＤ酩酊には、その最中に生じたすべてのことを記憶しているという特性がある。したがってこの殺人者の発言は、おそらく責任能力の回避のためのものと推察でき、またそのような発言で、罪が免責されることはあり得ないといえよう。

ＬＳＤの感情の解放作用に関わるこのような知識なしに、それを使用した場合に生ずる被験者の精神的反作用はさらに大きな危険性を呼びおこすこととなる。このような危険性を如実に物語るある事件を紹介しよう。ＬＳＤが発見されて後まもなくの頃、この新しい作用物質の最初の調査研究をチューリッヒ大学精神科病院に依頼したが、そこである男がこの物質を冗談半分に用いることの危険性をまだ知らずしていたずらをした結果、とんでもない突発事が生じたのである。すなわちある若い医師がからかい半分に、同僚のコーヒーの中にこっそりとＬＳＤを落としたため、その結果友人はチューリッヒ湖で泳ぎ始め、それを止めることができなかった。

このような突発事発生の危険性は、ＬＳＤから間接的にひきおこされた性質によって生ずる場合もある。つまりＬＳＤの作用によって、躁的性質ではなくむしろうつ的性質を示す錯乱状態に陥る場合である。そこには恐ろしい幻像、死への不安、あるいはその他の妄覚を伴った不安があり、それは強迫的な精神の破綻と自殺へ導くような不安感である。このようなＬＳＤの心の旅路は、いわゆる「恐怖の旅」に属するものである。

この種の事件で、特に世間の耳目を聳動（しょうどう）させたのはオルソン博士の一件である。彼は、一九五〇年頃アメリカ陸軍において薬物実験を行っていたが、その最中彼の知らないうちにＬＳＤを投与され、そのために窓から飛び降りて自殺してしまった。普段から冷静で、しかも精神的に安定していた博士がなぜこのような結果に至ったかについて、彼の家族には、当時何の説明もなされないままであった。それからおよそ一五年後に、ある調査によって秘密裡にされたままのこの事件の真相が明らかにされた。当時の合衆国大統領ジェラルド・フォードは遺族に対して、国からの遺憾の意を表した。

ＬＳＤ実験で、精神的逸脱の度合を軽くすることによって有益な実験経過を得るための前提となるのは、一つは被験者個人の条件であり、もう一つは実験の外的枠組の条件によるものである。個人の内的条件は英語で set つまり「構え」として表現されるものであり、一方、外的条件は setting「場面設定」として意味づけされるものであろう。つまりＬＳＤ実験が美しい室内で行われたり、あるいは自由な自然環境で行われるならば、ＬＳＤ酩酊中の被験者のきわめて敏感な感覚にそれらが作用し、深い体験と本質的な経過を得るのによい作用をもたらすことになる。また、実験者や観察者の性格的傾向も、被験

者の体験過程においては「場面設定」となる。同様に「場面設定」の条件として重要なものは、音響的環境である。単なる騒音は被験者に苦痛を与える要因となるし、逆に美しい音楽は、至福な体験すら生む要因となる。不愉快な、また喧(やかま)しい環境でＬＳＤ実験を行うならば、その結果は精神病的な否定的な体験しか得られない場合が多い。今日の機械的でそして道具的環境では、その複雑な背景とあらゆる種類の喧騒によって、被験者の感覚を刺激し、きわめて強いパニック状態にまで至らしめることすらある。

一方、外的枠組に劣らず大切な条件は、被験者の精神的状態であり、彼の実験中の気分であり、薬物体験に対する態度であり、またそれに対する期待感である。また被験者の無意識的な幸福感あるいは不安感の内容が、効果的に現れる場合もある。ＬＳＤの精神病的状況下では、その人間が有する素質的な向性が、いっそう極端な傾向となって発現する場合が多い。つまり幸福感はさらに至福感にまで高められ、抑うつ感は絶望感にまで深まろうとする。したがってＬＳＤは、うつ的傾向を緩和するために用いるには、最も不適当な薬剤であると考えられる。ＬＳＤによって生じる精神錯乱の絶望的な気分、あるいは不安感は、実験中の被験者を精神病的挫折へと追いやる危険性がきわめて大きいと考えねばならない。

精神的に不安定な患者に対してＬＳＤを投与することは、その患者の人格構造にもとづいた精神病的反応を正しく察知するのに有効な手段となり得る。つまり投与中に見られる持続的で、精神病的な障害をひきおこすＬＳＤショックは、その患者の潜在的な精神病性が解き放たれたものであると考えられる

からである。

精神的不安定性は、まだ精神的に成熟していない若年層の精神生活においても見受けられる。LSDによってひきおこされる強力な感情障害のショックは、神経組織が未発育で多感な彼らに対してはあまりに刺激的であり、危険が多いといわざるを得ない。したがって十八歳以下の若年層に、精神分析的もしくは心理療法的治療でLSDを医学的に使用する際は、かなり注意して用いなければならないことを警告しておこう。彼らは多く、現実の新しい次元の劇的な体験を意味深いものとして彼らの世界像に統合するのに不可欠な、実在との関係の強化に失敗するのである。つまり現実の意識を拡大し、深める代りに、彼らはむしろ現実世界に不確実感と非実在感を成長させるのである。若者たちの感受性の鋭さと、ものごとに拘束されない体験能力は、後年になって自然な幻想的体験をしばしばひきおこすことがあり、その意味で若年層の精神昂揚剤の使用は特に注意すべきなのである。

LSD投与実験は健康な成人に対して、しかも今までに述べたことを留意することによって、さらに薬剤の使用についての規則を厳守することによって、行われるべきであり、それによって初めて不慮の事故や精神的反作用から解き放たれるのである。したがって医学的管理は、非医学的LSD研究においてもある程度適用する必要があると思われる。つまり非医学的実験を行う前に、あらかじめ被験者の健康状態の検査を行うことから始めなければならないだろう。また実験中に医師が常に居合わせることが必須条件ではないにせよ、医療的救護がそのつど、迅速に行える態勢はととのえておくべきであろう。

LSDの投与による急性の精神錯乱は、クロルプロマジンあるいはその他の鎮静剤の注射によって、

迅速に、しかも確実に抑制することができる。

信頼できる人間が同席し、緊急の場合には、医療の救護を要請できるということは、被験者の心理的な基盤に安心感を与えるうえにもぜひ必要な手続きのように思われる。ＬＳＤ酩酊の大部分は、内面的世界に落ち込んだ状態として特色づけられるが、その中でも特にうつ的状態になればなるほど、周囲の人間との接触を必要とする場面が多くなってくるからである。

闇市場のＬＳＤ

今までに述べた事例とまったく別種の非医学的ＬＳＤ投与による危険性として、その濫用によって生じる薬禍の問題が考えられるが、この場合のＬＳＤの入手経路の大部分は密売買によるものである。いわゆる闇市場経由のＬＳＤ試薬は、その品質ならびに処方においてほとんど信頼できないものが多い。それらは所定の薬量について曖昧であり、大部分は量が少なすぎたり、ときにはまったく含まれていない場合すらあるが、また逆に量が多すぎることもあった。多すぎる場合は、他の薬剤が含まれており、しかもそれはＬＳＤよりもさらに強い毒性を有する薬剤であった。これら闇市場から供給されるＬＳＤについて、われわれの研究所ではその大部分を分析検査し、その成分の曖昧さについて確証を得ている。また、国立試験所の検査においても、われわれと同じようなデータを得ているようである。

密売買の薬剤はその表示においても曖昧であり、そのため服用限界量を越える危険性を冒すことにも

なりかねないのである。ＬＳＤ投与で服用限界量を越えることは、しばしば不慮の事故をおこす要因ともなるであろうし、また重症の精神的・肉体的崩壊にまで至ることもあり得る。それにもかかわらず、今までの報告では、いわゆるＬＳＤ中毒が直接の原因で死に至ったケースがほとんどない。ＬＳＤの使用による死亡事故を正確に調べてみると、そのほとんどが他の要因によって生じたものであることがすでに判明している。

闇市場の危険なＬＳＤを使ったために生じた死亡事故の一例をあげておこう。一九七〇年、われわれはバーゼル市の警察から、分析調査用としてＬＳＤとおぼしき粉末薬を受けとった。それはある若い男が所持していたものであるが、彼はその薬剤を服用して危篤状態に陥り、病院へかつぎ込まれたのであった。また同様にこの薬剤を服用した彼の友人はやはり同じ状態になり、しかも死に至ってしまった。われわれの分析の結果、その粉末はＬＳＤではなく、非常に毒性の強いアルカロイドのストリキニーネであることが判明した。

密売買のＬＳＤ薬剤の大部分が、なぜ規定量よりも少ないのか、あるいはなぜ中身がＬＳＤ成分ではないのかという基本的な疑問が残るであろう。それは、おそらく製造者が初めから故意に偽薬を作ろうとしたのではなく、むしろこの物質の非常に容易な分解的性質によるものと考えるべきであろう。つまりＬＳＤは空気と光に非常に敏感な物質であり、空気中の酸素に触れると酸化による分解が行われるし、また光の作用によっても、効果のない物質へと変化してしまう。そこでこの薬剤を製剤するにあたっては、前もって合成されたこの変化しやすい物質を適切に調合しながら、いかに安定した長持ちのする薬

剤へと仕上げていくか、その処方において苦心するのである。ＬＳＤそのものを作ることは容易であり、ある程度の整備された研究室でなら、化学の学生でも容易に作り出すことができるという考え方があるが、それは誤解である。もちろんその合成の処方箋はすでに公表されているし、また誰でもそれを手に入れることは可能である。またそこに詳しく記述された方法に従えば、化学者なら誰でも――ただし、ＬＳＤと同じく現在の法律的規制の枠の中にある純粋なリゼルグ酸を手に入れることができ、そしてそれを使うことができればの話だが――ＬＳＤを合成することができる。しかし、その合成反応液から、純粋な結晶の形のＬＳＤを抽出させ、先程述べたような安定した薬剤として調合させることが肝要であり、そのためには特別な装置を用いて実験を行わねばならず、したがって容易に薬剤としてのＬＳＤを作りだすことはできないわけである。

ＬＳＤの保存は、完全に消毒されたアンプルで、しかも光を遮断できる容器が使用されなければならない。サンド・Ａ・Ｇ社では生物学的研究用および医学的薬用として、このようなアンプル中に、酒石酸塩の形となったＬＳＤ〇・一ミリグラムを一立方センチメートルの水溶液に含有させて生産している。また酸化防止塡料（てんりょう）を主体として調合されたＬＳＤ錠剤は保存用としてかなり有効であるが、しかし無制限に有効であるわけではない。闇市場のＬＳＤ薬剤は――その大部分がＬＳＤを角砂糖に溶かしたり、あるいは吸い取り紙に吸収させたりしたにすぎないものであり――数週間ないし、数カ月を経過して使用する頃にはすでに分解されている場合が多い。

薬としての重要な価値は、効果的な作用物質として正しく調合されていることである。ある薬剤が治

療薬となるか、あるいは毒薬となるかは、おのずからその調合の仕方によるというパラケルスス（訳注十六世紀頃のスイスの著名な医師であり、しかも錬金術師であった）の名言があてはまるであろう。闇市場のＬＳＤは薬剤としてのしっかりした調合がなされておらず、したがってその作用物質の効果は最初から曖昧なものであり、信頼できないものなのである。非医学的ＬＳＤ実験で最も重大な危険性は、出所不明なこのような薬剤を使用することによって生ずる場合が多い。